

平成 22 年 5 月 19 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19530575
 研究課題名（和文） 幼児期における自閉症児、ADHD 児の向社会的行動の発達に関する研究

研究課題名（英文） Study on development of the prosocial behaviors of the children with ADHD and PDD

研究代表者
 本郷 一夫（HONGO KAZUO）
 東北大学・大学院教育学研究科・教授
 研究者番号： 30173652

研究成果の概要（和文）： 幼児期における発達障害児、「気になる」子どもの向社会的行動の発達を明らかにすることを目的とした。その結果、次のことが明らかになった。(1) 向社会的行動は、当番活動場面、ルール遊び場面といった要求される行動が明確な場面生じやすいこと、(2) 向社会的行動を行うことによって、発達障害児は有能感を獲得することができるのと同時に他児との関係が形成できること、(3) ADHD 児、PDD 児、「気になる」子どもの向社会的行動の生起には、保育者が重要な役割を担っていること、が見出された。

研究成果の概要（英文）： The purpose of the present study was to clarify development of prosocial behavior of the children with ADHD and PDD, and the children who required special care. Main results were as follows: (1) Prosocial behaviors appened a lot in situations where a required action was clear, for example duty activity and rule play situations, (2) The children with developmental disabilities got competence and were able to form peer relations through prosocial behaviors, (3) Nursery teachers took important roles for the prosocial behaviors of the children with ADHD and PDD, and the children who required special care.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	400,000	120,000	520,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：自閉症、ADHD、気になる子、向社会的行動、有能感、保育所

1. 研究開始当初の背景

(1) 一般に、自閉症児、ADHD 児の社会性発達支援としては、「集団からの逸脱行動を減少させる」「保育者の指示を受け入れる」などといった適応を目指すものが多い。また、

その手段としてはソーシャル・スキル訓練が用いられることが多かった。いわば、自閉症児、ADHD 児が他者からの刺激を受動的に受け入れ、集団に適応し、安定的に生活していくことが重視されていたと言える。

(2)しかし、自閉症児、ADHD 児は単に刺激を受容するだけの存在ではない。むしろ、他者に対して積極的に働きかけうる存在だと考えられる。したがって、自閉症児、ADHD 児においても他者への援助、物の分配などの向社会的行動は十分成立すると考えられる。また、このような向社会的行動は 他児からの肯定的評価を生み出し、仲間関係を形成することに寄与すると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、幼稚園、保育所といった保育の場における自閉症児、ADHD 児の向社会的行動の発達を明らかにするとともに、自閉症児、ADHD 児の向社会的行動が他児との仲間関係の形成、発展にどのように影響を及ぼすかという点について検討することを目的とする。

3. 研究の方法

保育所における VTR を用いた行動観察を基本とした。各年度の手続きは、以下に示す通りである。また、行動観察に当たっては、保育所側の同意を得るとともに、VTR には対象児以外の子どもも写ることから、保護者全員の同意を得るようにした。

(1) 「お当番活動」を通した向社会的行動と有能感の形成に関する研究 (2007 年度)

6 保育所、8 名の「気になる」子どもの朝のお集まり時における当番活動の遂行と向社会的行動傾向について VTR を用いて行動観察を行った。

(2) 「お当番活動」における子どもの有能感を高めるような保育者からの働きかけに関する研究 (2008 年度)

2007 年度の成果に基づき、6 保育所 8 クラス、計 15 ケースについて、VTR による行動観察を行い、子どもの有能感を高めるような保育者からの働きかけの特徴を明らかにした。

(3) ルール遊びを通した向社会的行動の形成に関する研究 (2009 年度)

①不織布リレーは、9 か所の保育所の 3 歳以上児クラスにおいて行われ、各年齢 3 クラスずつの計 9 クラスにおいて実施された。そのうち、「気になる」子どもとして保育者から挙げられた子どもおよび障害児のうち、I 期、II 期ともに参加した 3 歳児 2 名(男児 2 名)、4 歳児 12 名(男児 10 名、女児 2 名)、5 歳児 8 名(男児 6 名、女児 2 名)の幼児 22 名(男児 18 名、女児 4 名)を分析の対象とした。

②不織布リレーの概要

- ・遊びのねらい： 個人での運動調整と他者との運動調整を、ゲームを通して学ぶ。
- ・遊びの概要： 頭に 20cm 四方の不織布を

のせ、その不織布を落とさないようにコース(図)を歩き、グループ対抗で速さを競う。

・1 回目は 1 人でのリレーを行い、2 回目には月齢の近い同性同士でペアを組んで 2 人でのリレーを行う。

③調査は、平成 21 年 5 月から平成 21 年 12 月。調査期間は I 期(5~7 月)と II 期(10~12 月)に分けられ、2 回の調査が行われた。

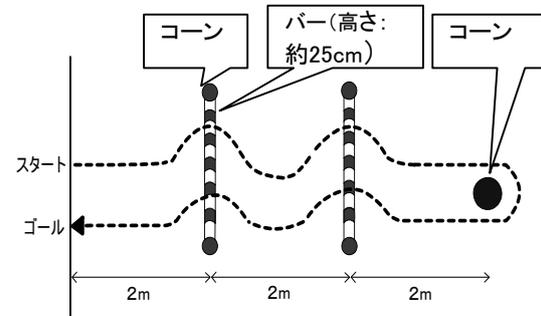


図 1 不織布リレーの設定

4. 研究成果

(1) 「お当番活動」を通した向社会的行動と有能感の形成に関する研究 (2007 年度)

①お当番活動場面の前までは、クラス集団から逸脱している子どもでも、自分が当番になると行動統制ができ、役割をこなせることが多かった。

②お当番活動場面は、自分の利益というよりも他児、あるいはクラスのための行動を行うという点でいわゆる「向社会的行動」が生じやすい場面だと考えられた。

③お当番活動場面では、向社会的行動が生じやすいだけでなく、他児に対する向社会的行動を行い、他児から認められることにより、発達障害児や「気になる」子どもが有能感を形成しやすい場面だと考えられる。

④お当番活動場面やそれ以外の場面で、発達障害児や「気になる」子どもの向社会的行動が生起するためには、保育者の場面設定と働きかけが重要だと考えられる。

(2) 「お当番活動」における子どもの有能感を高めるような保育者からの働きかけに関する研究 (2008 年度)

◎「お当番活動」までの流れ

朝の外での自由遊びや全体集会などを終え、教室に戻ってくる。外から戻った場合はここで手洗いうがいなどはさみつつ、「お集まり」を始められる体制作りを行う。すなわち決められた並び方・座り方で子ども達が座り、保育者の話を聞くことができるような状態にする。この間、ほとんどの保育者は手遊びや本の読み聞かせなどを行う。全体が落ち着いた頃、朝の挨拶、出欠確認を経て、「お当番活動」に移る。

◎「お当番活動」の流れ

どの保育者もしている活動が「今日の当番の発表」と「当番に出席簿を運ばせる」という2つである。

「今日の当番の発表」は当番活動の始まりである。出席を取る前に行われる場合と出席を取った後に行われる場合とがあり、後者が多い。大抵2人、多くて4人で、日めくりカレンダーのような形の当番表を使って発表される。保育者が今日の当番は誰か、クイズのようにして全体に問かけるケースも多い。名前を呼ばれた子どもは前に出て、他児に向かい合って横に並ぶ。

「当番に出席簿を運ばせる」のは、朝のお集まりの中での、当番活動の最後にあたる。当番が何人であれ、当番全員で出席簿を持って職員室（事務室など名称は様々）に運ぶ。届けて戻ってくる時、代わりに紙芝居などを運んでくることもある。

上述2つだけを行う場合もあるが（後に特別な活動を控え時間がない日と思われる）、ほとんどの場合、その間に様々な活動を挟む。多いのは「当番に自分の名前を言わせる」、「当番にインタビューする（質問者は保育者／他児）」、「当番と他児で掛け声（よろしくお願ひします、など）をかけあう」、「職員室から戻る時荷物（紙芝居やファイルなど）を運んでくる」などだった。「出席を取っている間保育者とともに前に立ち、他児を見させる」「当番に早口言葉を言わせる」「職員室から戻る時給食のメニューを聞いてきて、皆の前で発表する」ということをさせるケースもあった。

◎有能感を高める働きかけ—肯定的評価

①具体的な仕事を任せる…「当番に出席簿を運ばせる」「出席を取っている間保育者とともに前に立ち、他児を見させる」など、当番活動での一コマ。役割を与えられ、それを達成する経験は事実として子どもの有能感を高めると思われる。

②全体の前で発言する機会を作る…「当番にインタビューする」など。改まって大勢から注目されると、緊張したり恥ずかしくなったりするものである。さっきまでふざけていた当番の子どもが、質問された途端にもじもじする場面がよく見られた。そのような状況で、自分の意見をきちんと述べることは子どもの自信につながるだろう。また、他児から当番へ質問させる場合、当番だけでなく他児にとっても同様の経験になっていると思われる。他児が挙手し、保育者が一人当てて発現させる場面で、質問する子どもは堂々と大きな声で発言していた。

③役割や責任を顕在化する…「当番表」「当番の名前をクイズにして子ども達に問いか

ける」「当番と他児が互いに『よろしくお願ひします』など声を掛け合う」。当番と他児との間で、今日の仕事を任せる—任せられるという関係が明示される。当番の子どもに責任感を促す働きかけだと考えられる。

④子どもの行為を褒める、励ます…褒める状況としては「当番がインタビューに大きな声で答えた直後」「当番が出席簿を提出して戻ってきた時」。後者はねぎらいの言葉も含む。子どものしたことに対し即肯定的なフィードバックを与えている。当番活動に限らなければ「全体に姿勢を正すよう指示した直後」に全体に向けて褒めると、全体がよりきちんとした姿勢を維持しようと振る舞う場面が見られた。また、お遊びの中でクイズに答えられた子どもを保育者が褒めると、他の子どもが競って発言するような場面もあった。「励ます状況としては「当番が出席簿を持って部屋を出る時」など。やる気、責任感などを高める働きかけだと考えられる。

⑤発表の失敗や他事からの否定的な働きかけを肯定的にフォローする…当番活動中、なかなか発言できない、発表しても少し失敗してしまった、という子どもがいた。他児が当番の間違いを大きな声で言った。そのとき保育者から、「子どもが発表できるよう一緒に相談してフォローする」「当番の相方である子どもにフォローさせる」「否定的な発言のもととなった行為に肯定的評価を与える」などの働きかけがあった。これらによって当番の子どもは、スムーズに発表を終えることができた。

◎有能感を損なう働きかけ—否定的評価

当番活動の中では、際立ったものは見いだせなかった。

活動全体を通して見ると、「子どもの自由な発言に保育者が答えない」時、特にそれが逸脱児だった場合は、逸脱児がつまらなさそうにどこかへ行ってしまふような場合もあった。「全体に聞こえるように子どもを名指しで注意する」行為も、子どもが自信をなくすようなことが子供の内部でおこっているかもしれないが、筆者の推測にすぎない。目に見える反応としては、多少ぼつゝの悪そうな顔をするか、特に表情を変えず行動を改めるかであった。

また「子どもの失敗をわざわざ口にして他児と比較する」という保育者の行為があつて、言われた子どもが走って集団から逸脱しようとする、という場面があつた。元々多動気味の観察対象児ということもあつたが、それまで集団活動の流れにのっていたところを急に離れようとしたのは、保育者の言葉が及ぼした影響の大きさをうかがうことが出来るのではないか。

(3) ルール遊びを通した向社会的行動の形成に関する研究(2009年度)

①不織布リレーの概要

・遊びのねらい：個人での運動調整と他者との運動調整を、ゲームを通して学ぶ。

・遊びの概要：頭に20cm四方の不織布をのせ、その不織布を落とさないようにコースを歩き、グループ対抗で速さを競う。

・1回目は1人でのリレーを行い、2回目には月齢の近い同性同士でペアを組んで2人でのリレーを行う。

②分析の手続き：不織布リレーが行われている間の対象児から他児への肯定的行動および他児から対象児への肯定的行動を分析の対象とした。10秒を1フレームとし、各フレームにおいて肯定的行動が見られた場合には1、見られなかった場合には0として肯定的行動の有無を調べた。

分析に使用した肯定的行動の分析カテゴリーを表1に示す。

③結果：対象児がリレーを遂行しているフレーム数および肯定的行動が見られたフレーム数を表2示す。これより、不織布リレーにおいて最も多く見られた肯定的行動は対象児から他児への肯定的行動、他児から対象児への肯定的行動のいずれにおいても「応援」であったことが分かる。また、頻度は非常に少なかったものの、対象児は「相手が落とした不織布を拾う」という肯定的行動を他児から受けているだけではなく、他児に対しても同様の肯定的行動を行っていた。さらに、対象児が応援席にいる場面では、「その他」の行動として他児がリレーをしている際に不織布を落とした場合にそれを教えてあげるというような肯定的行動も見られた。

表1 肯定的行動

		初期	中期
乙児のリレー	リレー遂行	514	391
	拾	00	00
	他児から 応援	109	191
	その他	045	009
	肯定行動合計	155	195
ペアのリレー	リレー遂行	595	555
	拾	005	000
	特定の他児への応援	000	000
	他児へ 不特定の他児への応援	000	000
	その他	005	000
肯定行動合計	010	000	
応援席	拾	009	005
	他児から 応援	041	055
	その他	018	032
	肯定行動合計	068	091
	応援席	拾	000
特定の他児への応援		100	109
他児へ 不特定の他児への応援		377	300
その他		059	045
肯定行動合計		509	400

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

- ① 本郷一夫 2009 「気になる子」の記録と伝達アドバイス. 『3・4・5歳児の保育』, 査読無, (2009-2010 12/1月号), 小学館, 14-21, 24-26.

[学会発表](計3件)

- ① 本郷一夫・飯島典子・杉村僚子・平川久美子 2010 幼児期における運動協応の発達1 - 「ゆっくり急げ」不織布リレー-. 日本発達心理学会第21回大会 (神戸国際会議場, 3月28日)
- ② Hongo, K. 2009 The Effect of the Intervention for Nursery School Children who Require Special Cares. XIV European Conference on Developmental Psychology (Mykolas Romeris University, Vilnius, Lithuania, 8月20日)
- ③ 平川昌宏・本郷一夫・飯島典子・杉村僚子・平川久美子・董存梅 2008 「気になる」子どもの保育支援に関する研究18 - 朝のお集まり場面の分析-. 日本発達心理学会第19回大会 (追手門学院大学, 3月19日)

[図書](計3件)

- ① 本郷一夫 2009 幼年期の障害. 田中農夫男・木村進編著『ライフサイクルからよむ障害者の心理と支援』, 福村出版, 第18章, 254-263.
- ② 本郷一夫 2008 行動・情動を調整する力をつける保育. 本郷一夫編著『シードブック 障害児保育』, 建帛社, 第5章, 56-72.
- ③ 本郷一夫 2008 保育・教育の場における発達アセスメントと支援の進め方. 本郷一夫編著『子どもの理解と支援のための発達アセスメント』, 有斐閣, 199-217.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本郷一夫 (HONGO KAZUO)
東北大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号: 30173652

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし